



新編

古今事考

二

古今
14
52

5
4329
1



門 八
葉 4329
卷 1

如來之海報

注記

其年乃有集於此

其年乃有集於此

海夜半之有集於此
其年乃有集於此
其年乃有集於此
其年乃有集於此
其年乃有集於此
其年乃有集於此
其年乃有集於此

八五
4329
1-3

IND 1

とらまへり法集のり
惜むししちまの
喜之海路の
枕ししかふ説高
此書抄の
はしし人

一集越探書肆佳業
ちしを
小祥忌辰の
はし
し
し
し

三終の序を要する事
わきまも免せ旧撰五十餘年

空中の巻

巻之六



蕪翁白集卷之上 几董著

春之部

日のかえとるおもも編るのうらや祭
之帳の雑煮らぬるも長者あり

離落

ふらふらのあちちとよもよふあうち
愛る声きき日も暮らうらり
うらむの産ありあきおきあり

嘗を雀んとえーる水も喜

画賛

くさそや淡色く後斬る梅
雪の日松をとりらなる青心
くさすや家内梅を飯時分
嘗や淡く案て鳥く西のよ
くさす乃啼やちいさ口のりて

禁城春色暖蒼々

青柳やふ大男乃竹くまう
若きう根を口れる柳を
梅ちてさひり成ーやあせ
梅やうて柳はくを雨のむ後
る柳や芥生の里のせうの中
七の松やくさすや柳を

俗の草庵

くさす梅くま速をさす
くさすて雛年くさすは意うさ
白梅の黒きくさす 鴻鶴被

あら梅や浪ぶるよ深垣乃外
舞くの場もあけらう梅ももど
ゆはとてあまあめりめ此宿
宿の梅おれをんたのりこり糸
摺子本て塵おをほふら
てくをよふ政の嚴判ある
をいふりあふゆきを代
乃まうあきし
隈くうあささやうえれを

しら梅や少せ茶店にさすれ
らあや螺鈿のほろ卓の上
梅はて帯穿り小室のたぬり
原儿をうりて梅のあきし
地をきて人あまら梅う宿
あきしうりのほろあきし
字儀を言はるんハア
梅頃りたれあきしやうち
あら梅の梅あきしあきし

小豆工頭小家の梅の花かみくら
梅を色 南々々々くふすなぐ

早春

ふにちや十京をさぐるもさつ
所志の清くや谷の氷すそ
やふ入のさそや小豆の煮るうち
新つるやを心目さうらのやを
やぬらうや守袋をりよれ草
類ふ入や移架のいある傘の下
やぬらう中山寺乃男とふ

人日

七ささや袴のぬ乃片むす
あれさうらう径さうらう芥の申
古さやあさうらう押ささう中
几董とりされさる

あさうらう

節まきうらうおさうの春
肘白で僧乃うらうあや宵の舌

春のあつこき馬あそびをゆく
春月や下金堂の木間より紫

春夜聞琴

漢船の舟のなほそよおあめ
あつこき馬あそびをゆく
公達うゝ孤化より
音をとり我の音へ
むらさきの曙を賞す

春の舟やもろあけちの
女俱いで内裏ぬらん
紫はむ女やふを
さゆきを多くて
おや瞳月

野望

草やけ井水の声あそび
指南車を胡地より
さよ舟乃をらしてゆく

橋ふくす日暮んとする春乃水
衣水や四糸五條乃橋の下
足よみのうらりて溜るなるれあ
春乃水背えたる田仍んとてふ
去の水うらたき移輝の影るたは
物を遠く船のなほみや去の水
西の京よをけもの撫て
た久しくあれ果る家
春乃水のうらりてふくす

春雨ぬ人住て響壁を渡る
おほの袋めりた春乃あめ
春雨やかほある路中若うらり
去るや山後の小具ぬさそかと
流る細きを海声や去の雨
ぬまはさふ池の水をや春乃雨

夢中記

春雨やの書めかれあられある
たぬさめや暮あんとてらなもる

春雨のあつちやくと兼て傘
朱漆の筒もわらて衣の袖
春雨のあつちやくと兼て傘
春雨のあつちやくと兼て傘

ある陽生るるま

古庭の茶釜花さく椿の
あぢきや椿庭らむにほすみ
玉人タマシははるるむらくはるるる

物年やそのましくろ袖た
たはむやる洞四塚の影の
初はやあけつりり日のある
蒼らふあしもあまよふ花の
ある人れもあつち

命婦のあつち餅たを子彼な
うまくに京やるる一め田に
ふたつて津もは里や田標あ
静らう塔で水虎たより

乃^ヨきて警^コ破^ヤ田に一のたを固る
丁行て門田もたごとくおもはるし
返るる田のよの月乃見よあつ
此れあまごふに居のよあつ

郊外

物たやたしとあまの白きお
うけりあも貰つと土をたはる人

芭蕉翁會

畑にたやとあまのやとたのあつあ
ちとあをあらの在所の種々
細おのあるたさ此種はあ
兼門ふあつて

若あつ申つおちるははあ
目くるん稚子とた春のふたつ
柴刈つと若をとあつや稚のあ
亀のつ通ふ大工やあつ
瓦のや何つとあつてさつ
むと起て稚とあつや宝つ

横大寺の草のまのまの土のまの
今も人新茶もまのまの
一冊中春管書
新茶書も授人外池寺
兼門ふあつて

芭蕉翁會
兼門ふあつて

妹ら垣初

司馬相如の故事なりとせんまは
まのこのまじしむんくもまもま

くくんの
賈誼の選俗にて儒者まらるゝ所と
載叔倫のくくの人まらるゝ所と
僧の逢着て歎冬花出寺空行を
日巳科十三街中春雪遍馬蹄
今去入誰家としか詩をまらるゝ
歎冬花ハ露のまらるゝ土のまらるゝ

馬蹄今秋をまらるゝ堆る家と
くくんの詩よりまらるゝ

畑まらる

漢の祖の咸陽より一時の故より
又魏朝の修業をたたらるゝ時代と
考合す

まらるまら
一鳥不啼山更幽すれ玉前ら
待る耕まらる畑くく俗まらる
て耕まらるまらるまらる

市川の隈く自類の住まらる

春心挑美人

妹ら垣報まらる草乃花咲ぬ
お梅や比丘よりある比丘尼寺
紅梅の薔花咲らむ馬の糞
垣報くものまらる接木外
裏門乃ちに逢着まらるまらる
畑まらる法三章まらるれのもと
まらる傍や草のまらる八平氏

まらるまらや坂をまらるの驛舎

西山をまらる日

まらる乃尾をぬむ春の入日
まらる日や維子のまらるる橋の上

懐旧

まらるまら日のまらるるまらる
春の所報日のまらるるまらる
畠まらるまらるまらるまらる
耕まらる五石乃粟のまらるる

おろすやけらるや我産
大はゆらう糞為やう 蕪のそ
大初孫の宮もつらなもはをあふ
はをくらや水田の風も吹れ自
蕪掃て 次蛇をうつ小家ひ

無為の會

曙のあけをきく乃幕や表の風
あそきのはゆらう旅や表のうせ
片断うさうは條るや春乃風
のうさうさうを吹つせのそなふ
河のあやまらぬまゐる巫女う袖

九葦の蛙合催し

月さすや蛙たのむる田面をか
園うはてをさす蛙をさくあふ
苗代の色減るおふうはたれ
日ハ日れを扱ハおのけと編蛙
連ふりてのそ流ある羽の蛙は
獨鉦鎌首水け端のうらな

獨鉦鎌首

顯昭ハ律傳まで獨鉦をよま
秋歌のちるち後をうらなう論井

ちう取連はあハ謙首とていふ
三人對面すといふ
井蛙抄のいふこと

くはるまゝつあゝあゝ此胡蝶
曉の雨やまくろろ乃乃層りら
よもやうらう青空のきりあや種後
左何れ流をり片種なら
あつらうく南陽のや焼物
かゝる長帯力いさゝかあ
も乃こゝ東左曾詔の入
乃乃らんこいおん
錦の小袋をさうと
ゆ流なるとおるひ
春色うたふた

山ふきや

左きりといふ
本柄の扱の絶層ハ
桂の乾物のなる

山吹や井手を流す 艶眉
層たると舟をよれハ
骨松よくと
いふや
野ともしに焼る地
片り地やあゝ
片りて石移したる

近久く心てうけぬ御濁り
片しきで片山里乃飯白し
岩う腰我れえろ片しき

上己

去雛やむりしの人れ袖儿性
糸をひる良口せれや雛之對
たうちもの比やうとあや雛の鼻
心休や長さちくとた首を
雛見せろ灯を引らうや長の南

此の雛の...
...
...
...
...

雛をる都まのれや桃乃月
喉や痛て牛つなわらたや桃を
南人を吼る不あのもは花
さらの糸桃つとて小家外
家外をささむり振ふは看
几やせのふのそこのあうととら
やぬりのあうてさあん中の糸
風入馬蹄輕
木の下う蹄乃うをや散さる

〇

ままぐうの夢はく片一の梅は
剛力ハ徒々見るさあ山さぬら

曉臺う伏水流家おる御ひて

お枕林をせあうは強我の梅人
暮んと手書きく一本の山さくら
錢買てへるやうは山はぬら

糸梅賛

やと暮て雨もる看やいとさくらら

糸屑の梅はぬれて山はぬら言

あつともおりともぬれ山梅

硯鐵ひと日閑院揉乃さぬら

みより梅ちうなぬら山梅

旅人の鼻まて梅一ぬら

梅より日ハ照はけて山はぬら

吉世

花くをく梅く色がぬら川

花く暮て我家をせぬら

花ちるや梅より友のぬら

五音屑の

古今集ユ集の糸屑の梅はぬら言
別れのあつともおりともぬれ山梅

とゆを糸屑の梅はぬら言
古今集ユ集の糸屑の梅はぬら言

とゆを糸屑の梅はぬら言
古今集ユ集の糸屑の梅はぬら言

とゆを糸屑の梅はぬら言
古今集ユ集の糸屑の梅はぬら言

とゆを糸屑の梅はぬら言
古今集ユ集の糸屑の梅はぬら言

花の世絶るまで花を位、信也人
阿古久有のさうさうさうさうさうさう

高州をりる日

これ住て花く真田う諷うか
正川くさうせう花や流れ去
たうら及や當取をうけろ花一本
日暮るさうさうさうさうさう

岨竅へ海の人この花は暮

花の香や送客のものも火清き

雨日なうあまふ

幾士の簾やありーの花衣
形残ハ後のせうけそをえろ
たを舞てびさあー白拍子
花うまてたういねあうい

たのうさう人のあお所

やまのわなを訪らて

礼を縮し草履もたておあ
居風きくおあく花のまうさう

Handwritten notes in the top margin of the right page.

Handwritten notes in the top margin of the left page.

Handwritten notes in the top margin of the right page.

夢もたまたま帰や花の心
物も花の春は心も入る花の心

一片花心減却春

さゆり指義人入る後や減却を
花の幕舞如を飛く女あま

やぶと花をひくふのさうかみ

はせあひくう後さうかみ

はせあひくう後さうかみ

小冠者白髪て花入る人を外はり

おちしある夜もあまを春の暮

誰さのひびき花もたはれられ

閑帳ろ錦たきさうき春の夕

くく海のさむれを春の日られたり

春の夕たきさうき香をたたく

花ちりてあつらる寺とくさる

苗代や鞠るの篠ちりくさる

甲斐なふくやあまをれ梨の花

梨のも月書よむ女あま

さうかみ
一片花心減却春
社子美々待句一片むらあま一遍
くさる春うゆるさうかみ減却春ハ
忌却失却木の却字とあま
兼字さう

苗代や
Femur...

くちびる日ありく培ふ片柳を
ゆもとん米踏音や若のちぬ
くはひるれ春をちあて春は花

春景

菜の花や月よりあけ日西に
たのそぬや筆かある少ゆ片あ
菜のそや鯨もよらは春め

春次廣會

行蹙て南院の風はく入る日

極ゆるや床ハ維方々春替る

暮春

ゆく春や遠巡りて生さぬ
ゆく春や播者をよらむ哥乃主
洗足の鹽も濁りゆく春や
そののそる春をあらひては舞多り

台波のふの葉をくちりて

ゆく春や白た花乃ゆ垣入りま
春をくむ座主の驟白くはれは葉

菜の花や月ハ
あのをや牛の
叶二句ハ洛外のくき
菜の花や鯨
南は乃西は乃の浦く兵庫の
うらすなう菜の花はうあまの
この田舎のむるものえあつちん
はうりゆまはん

かふまきや
維摩季茂ハ一丈四方の室ハ六九
を集めて洗法はるしハ維摩季經
うらハ一丈四方うすはう方ハなり

行春をさすまゝの夜明け
さし長き日の春の夜、さす
や春の掃何くのあつたもの
あゝ人こゝろをこめて

西の空をさすまゝとくれの春
春情をさすまゝとくれの春

上野城の夜明けの光景
上野城の夜明けの光景
上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

上野城の夜明けの光景

夏之部

絹衣をぬき申ゆりて夏衣
辻をたぬき人のせほころもえ
大兵のオチあまのやふを
ころもえを就着てお化二人

唯

夏衣をぬき申ゆりて夏衣

たのしき名敷のぬりの給ひ

瘦膝の毛に微風ありあは

はるけのまぬたりを夏衣

えれるねをのまをり

あつてあつてのいこめさ
たる

あつてあつてのいこめさ
たる

楊のうきと病せありせうぬ

夏衣のやうらうらあたる

朝走る女切をやかとせと

かきといた平安城を築造す

子歎 柩をたたくむや問ふ案

楊の
楊のうきと病せありせうぬ
夏衣のやうらうらあたる
朝走る女切をやかとせと
かきといた平安城を築造す
子歎 柩をたたくむや問ふ案

あつてふつめを中在術
かきまは侍や都のそらたのめ

大徳さるて

町を狭くすけ東四市以席
岩倉乃御女志せし子 祝
稻なま乃由茶とよ宿や竹を

築おねの山を越る日

みやこのなまやまを

ワするふとたといや物なるとま

音あつてびやくはりし時を
草の雨ふの車一さてのち
おめあつておきまふとくニ三片

泣翻吉本吐録連

間王乃口や牡丹を吐んとまを
寂として客の控るはかるとん
北車乃とろとく牡丹を
ちうそなおしとくちとん
牡丹印て氣のおしとく

あつてふつめ
四郎二郎ハ古法眼の俗名あり
あつてふつめ
あつてふつめ
あつてふつめ
あつてふつめ
あつてふつめ

井六二氏
大徳の歌の中 跡をたす余里合
歌の中

度之布の
文選の持中と相去り万余里各
在天二万

七拾九

山嶼のあつらふと 自在丹
廣庭のちんや天乃一方
集流乃主人在新布穀の
二是をむしてはこれ一語
発るをもとてはこれ一語
王侯の交るむ方のハ鶉衣袷
みで山伊の名利といふは
お産土の首かけくぬ鞠鞠を
閑居なるるや 孝母るとや

山人
かへつゝふとちんやと

山人のこころは鳥なのうり
食次の底たたく音やうんこ
足跡を字あもよみはす閑居
と乃め々置の表やんこ
かたしとせの礼義やうんこ
閑居なるさたのたも砂と
うんここのもたふ不可もふか
揮舞毎旦盛
名のれくあ志のうらふち

七拾八

をうつてくたはらむとむのたれてる
音のあつ音のあつ杜のあ
や裡序く柳まつ別る

みりおや六里のたつ更たあ
船のたつあつてまぢおまの門
みりおやまぢの上つあのを
おや同ん流る川も水
おや花つちをき浪序
経夜や草間流るし解の泡

こゝろあや
けりハをやう大るくこゝろあや
あや

みりおやニスへあゆく大井川

揮毫老犬



みりおやを眺らてお公おの
経おや浪ち際乃捨篇
みりおややなほおる白拍子
みりおや小入世おる所を
京都の心を春の揮毫ある

経おや一つあるうて志賀の松
みりおや伏見の戸かど淀の窓

こゝろあや
けりハをやう大るくこゝろあや
あや

卯のむしの矢のちりて落の庵をよみ
玉をこれと夕乃極実とよみたり

糸位上人の五歌よもひ

たる力のともぬきさへ

実さやや花のころたる庵のま

志のゆややをえくあくる夢うの雨

砂川や或ハ夢うを流北陸ナ

夢うの葉を上げ君とゆせと雀 帆

三井寺のや日ハ午のせまるの若柳

あらたう居をトたるを

物まよ小幡まらぬ住居うさ

時ををきて奈良とまやみをよ

窓の燈の袖うのちる若葉外

不云とつうつと折してつうとつと

施頂の城たのしむとちあふ

糸葉して水白くま黄へち

山ははちて小舟漕やくめをよ

船を截てつと家名路のめをよ

夢のまよ

すくぬ 鄭ハ 鄭鄭の正なるあ

てハ小 鄭すーとまらぬ鄭とみ

晋の王子 鄭う 牛とまらて 鄭君と

以り、トハハカ

窓の燈の

保ち、ハ 寺何や彼のつらま

灯のハ 寺とゆらるあつされえ 寺

町とあも、すに びらま ぬたん

寺、ハ 寺町ハ けいも ちまよ

もちや、ハ 寺あつ ぬらん と 大 世 界

あり、ハ 寺とまらて ぬらん

城の隅に佇む娘で、葉や
尾寺の鐘響きたる宵月夜
あら深き裾吹城の松は春
城を去りて内へ居る力の夜はめ
もよほしう三本松の

水橋へ真一で

めやはを夜を待ててやよら

石井戸や城へ飛ぶ魚の音は

ふ風う城の底水やわはら

城なりしてまつ僧の坐を

出たおまて

三軒家大城へ乃くやの

城の音を思ひ花の散らひ

諸子比校の信ある今よ

いふはよのめはけ行われ

城を去りて翠微はるむ家の内

若竹や柳むの娘女あり

笋の露の葉肉やを

うらハウせ
後子とまきうの余情ハあま
書風まじやこニまう上風の文字

うらハウせ
書風まじや

美竹や夕日の光を照らす如く
筍や 碑の法印の寺とハハ
く 此を離さるるもあはれ
垣越へ墓の遊りやうを

菅家の雅周の閑を信て

うらぬく音あやまをを松もと
も 旅やがまあせ村乃妻ふら
病人のなるもさうりまゐる乃秋
旅を居移まると此後とて

信東の右や秋庵より

目あのかきとてや出ゆる

あるはあやと京をいづくは移ま
狐火やうたはと何也乃妻は白

大魯几童ふとて布引隊た

ちうりかき逢仲竹

翁や 移まら仲乃 水車

丹波の加悦とてあま

な何ぞ紙を竹さよふにうの後

あはるき欲をあるのまはれ
飲桶をあはつと樹下く床几
飲つけし侍もあはれ
飲すわき招き嫌くやうか

免足之周正當ハ女月仲の留

なるを卯月のくらんて

追答とふはあはれ

麦刈ぬ出ぬすもやをほの程

かうたぐにふ月合生々ゆの谷の房

かの康阜このまはれ

花はららぬの瑞ふはれ

路たてて香くせすの候いたらうか

愁ひたし思ふのそはを花いたら

浩康芭蕉菴茶成日

耳目肺腸あはれ玉君ををば

まあつ眉あはれあは美人か

青くあはれあはるを舞あは

うあはれあはる女あはれあはる

夕風や水青鷺の脛をくた
たちをふるうらむれ時や古鏡

假花の一本きくはれて
糝解て草紙凡の音ゆりん
友山や海にふれたるえ狭人

述懐

推の花くもまきさあまをいし
水保く利謙竹らすまを流り
志のまや五初の途江の麻白田

採草を湖ふき根の儂まの
葉のむやけられら此月花む
踏むこの刈る葉花さくやむの
出のまに害りれ葉ッ枝の花

宿華る舊心あやして
法必此俳士を集めて

友山に今を述りける時
うさ草を吹あつたや花あり
すみれのうちが柱や老う時

湖へ富士をまよふよふとて雨
 きみとれわ大河を前う流二新
 きたれや伸の気捨りける
 小田系て合羽常との白屏月お
 さみよれ乃大井浦たるりしとて
 下はふ雨田毎乃園とあひぬ糸
 青飯は仰にたしめぬた
 旧歳のみとくこのなをて

水桶うもつてあふや此か子
 花とよの磯うちをむゝなる木立
 園十秋ゆりもてしりやなこころ
 たりし玉笈乃^{ナハフル}地衣たのつ地外
 行くてあはに行くゝなるおとふ
 みちのく北五はまゝ草麻を
 たぐれし
 葉うぐれの花さうせと、思ふけ
 離るれたるかきと踏めて田抄が
 籠りてぬる田花乃男のま

持衣の袖のうら這ふかゝる

一書せし用窓の半を

学問ハ尻うらめけるかゝる

つひやう此用字乃に

抱せの佳きと宿やうせ目

ふりやうをうらめけるかゝる

雪信う幌うちあふ

画賛

ふと葉多くあはれとて女うら

同の戸に水雛のそら青なる

帳乃鼻も合歡の毎ま

揮いふ力をたのむる

春居居合をうらめける

誰住て橋流るる

志のめや物をのうらめける

老あり物乃とて

居る乃各古を白なる

杉舟漕ぐ水窟あれたる

老なう一物

二人一物

秋田の土ゆり

作やう

中

中七下五迄賢境こよ二介 故郷ハ
四流乃流直下の他と 借してハ海
をさす所のこよもものを 兄と
常人と大家のけちめを まる

二人
句解上に見えたり

る百日星もやまぬおくりふ
日よひてあはる華の百あき

孝子病存不二の夢

兄の家つやもて

降くて日枝を北干乃化務を

る南判髪三本掛きて

取ある梢もせみ乃小何外

石上の鑿はたるは水うか

床合を音なくあはるは水うか

丸山よりちよとせと書

たるは積りたるをみたる

仕友縣令の比々常判を

もよめむらさきとを

泥中より曳て

鏡魚の青破もあは山清水

二人してむすも濁るは

我宿といふありを

尊いせ九人死居るたの立

二人
句解上に見えたり

空うかやおのる唐乃三十里
ゆふかや黄のついでもあはる
夕白の花嘴の猫や解ふあはる
律院を歌せよ

心石も三つ田ワきせれくす舞葉
蓮の香や水をとあるの若五ニす
ゆき乃浮きあはるる蓮の心
白蓮を切らんとおしふ僧の店
河骨の二もさくや雨れ中

花のみのみとれあをるる
やをらたら入るる
いとたるとて

羅く遮る蓮乃くちい哉

雷く夜日三句

雨をくやする國司乃くみか
負服の守敏も降る早うな
大粒な雨ハ祈る奇特うな
お水もる里人のあやるれ月

瓜小室の
垂乱しき官人の漂ゆりく瓜
よあはせしきとありしよせら
作あり唐詩進子青門去テ種瓜作
マコトとふま像てふくく味ゆ

臺ちのろ中草ふくた夏の月
ゆけけろは能くも何夏れ
何童の志さる宿やなろ月
瓜小室乃月よやおも陽君子
雷く小丸ハ鏡水て此の心
あゝ花ハ雨くされて此をけり
あゝうゝゝゝ
弓矢の節の袖をたひり
細腔く夕風さるる 簞

菰根うて

あまの比類もちどり菰根山
即佛く登海へんかひとあは
五病を智のあまの海送る松園

寓居

半日乃閑を構やせみ此夢
大佛のあまの宮様をみろ色
帰るや行者乃るる午の刻
帰るや傍正城のゆあま時

菰根うての
松園ハ藤余の尼寺と英徳寺と
いふ菰根を智の尼寺とあはせし
梅ののり法と法無上人の一枝起
清くを病の尼入るるとり

うけ香の何とあるせみ衣
かけ香や唾の姫入りとたあ
うけ香やつそれある袖たみ
雁宕ふくおたれを分れた
五と見ておの裏袴おかつふ
とくしてまうたのはるまの
舞國のそれほち席にお夏を
まじらふの團画うんあれけ
後一草草るあまうらう

七日

後零のやま首の風うら
まじらふのや傍の行なる梅を
か後ろ西洋う榻を下て
あふの口うさたの夕まをみ
細おのりさあのり涼なる
そとさや都をほきくあれ川
首圃う視をまひく
河津や蓮うまうらう

楳園今や傍の
セタヤよと歌きくく梶と糸を
其角なり
楳園茶えせの梶女とくく
なり大粒堂のあ玉圃ハるの縁
ふあうらう

川床の物よは御のまき居るを
涼しや鐘ををたふるおるお

鴨のうらあうよ

川鴉や樓上のくろをきり鳥

雨子の月雉や鴉のの脛白さ

月こ野を弄る産網る小纏

川鴉や海を東よるおををこ

雙林寺指比千句
ゆらとら花華もいよとて一千言

白雨の門脇よのく人たまり

夕とらや草葉をほむむむ草

施末水粉

暇よのや傍の所の施末は

水乃粉のその今も草の庵

あの粉やあやとらをほるは君

旅意

北日路乃宵中くくやをほ

揚州の津もろをくくやをほ

謝園の今夕の
...

...

あはれとや不二の権姓
宗監ふまゝのまゝ
何某半上の宗監ふまゝとこれハ
加まらぬと云ふも香んと云ふハ
その厚なる宗監し涼をえ政上人
技業流逸傳を著すもきく宗監
さし入るるもと云ふ能ふ俗の業
はつとて載せざるもと云ふと
はる非あつと云ふ後あり

而して女志はとれちを乃孝
そのまお四澤のた乃潤てよか
た穢とよや富生れ経世小家あり
日海への元山はゆるあはれを
居るる舟の海をみる暑くを
揮毫宗廟本者

星守の日の刀のゆるるるを
宗監の書あはれよ大に家
首をたて居るるをゆるるる

始居りて書子を避るる者あり

元乃のつゝ念り揮毫

慶長居士のつゝ親父と并ぬ人
片干や甥の傳行よ東大寺
と云ふてん逆し方銀河三千尺

言作

善乃のつゝのつゝなはつて
裸力つて弟のつゝのつゝを交
はるるつゝ福真つておとよむ

書

負北舟の青伸流まやなをらへ
出氷のかたむく柳舟夏後
鴨河乃ちよの舟の
田中よのる里うそ
ゆめうらむ風とよくみそを川

蕪村白集上巻終

島田藏書

